◆特　集◆

ESD世界会議、その成果と課題

名古屋市立大学大学院人間文化研究科　別所　良美

国連ESDの一〇年（二〇〇五～二〇一四）の最終年会議（正式名称は「ESDに関するユネスコ世界会議 UNESCO World Conference on Education for Sustainable Development」、開催地通称は「ユネスコESD世界会議あいち・なごや」、以下では「世界会議」と表記）が、二〇一四年一一月一〇日～一二日に名古屋市の国際会議場において開催された。主催は国連におけるESDの主導機関であるユネスコであるが、日本政府の他に、愛知県、名古屋市が共催機関として支援実行委員会を組織して世界会議の準備全般から開催地の機運醸成をも担ってきた。名古屋市立大学人文社会学部は、二〇一三年度からのESDを新たな理念とするカリキュラム改革を行っており、世界会議の成功のために積極的に貢献してきた。具体的な最初の関わりは、二〇一二年七月七日に中部ESD拠点協議会が開催した「二〇一四年プロジェクト・キックオフ会合」に筆者をはじめ本学部から四名の教員が参加したことであった。「中部ESD拠点協議会（RCE Chubu）」とは、世界各地のESD推進のために国連大学から認定された世界約一〇一所の拠点の一つであり、中部大学と名古屋大学の教員を中心に、中部地域でESDや環境教育を推進するNPO関係者などから構成されるネットワーク組織である（代表は中部大学理事長の飯吉厚夫氏）。筆者は二〇一三年度から中部ESD拠点協議会の運営委員会の一員となり、世界会議に向けた種々の取り組みに参加してきた。

名古屋市立大学・人文社会学部としては、名古屋市との連携企画として、「広報なごや」二〇一四年一月号のESD特集ページを作成した。人文社会学部の学生を中心に集まった学生編集委員会が、ESDと世界会議について市民にとって分かり易い特集を作成するために約半年間奮闘した。また人文社会学部が主催した三つのESDシンポジウム（「ESDと大学」二〇一三年二月五日、「ESDと大学2」二〇一四年二月八日、「中部の《里山資本主義》」二〇一四年一一月八日）そして愛知学長懇話会主催の「大学生ESDリレー・シンポジウム」（名古屋市立大学会場での開催は二〇一四年七月五日）も世界会議への機運醸成に大きく貢献したと思われる。

世界会議の様子

今回の世界会議は、二〇〇五年から二〇一四年までの「ESDの一〇年（DESD）」における世界各地の活動を総括する最終年会合という位置づけであり、名古屋で開催された本会議に先行して一一月四日から八日まで岡山市で「ステークホルダー会合」としてESD関係の諸会議、すなわち「グローバルRCE会議」（一一月四日～八日、主催は国連大学）、「ユネスコスクール世界大会」（一一月六日～八日）、「ユース・フォーラム」（一一月七日）が開催された。

これらを受けて一一月一〇日から名古屋市の国際会議場で三日間の本会議が開催された。開会式ではイリナ・ボコバ、ユネスコ事務局長が、ESD世界会議の意義や持続可能な

社会をめざす価値観の重要性を強調した。また下村文部科学大臣からの挨拶があり、さらに開会式にご夫妻で臨席された皇太子からのスピーチもあった。

世界会議の本会議は、一四八ヵ国の政府代表（七六名の閣僚級を含む）と専門家約一一〇〇人が参加した大規模で複雑な会議であった。会議は、三つの全体会合の他に、四つのワークショップ・クラスターから構成された。各クラスターのテーマは①十年間の成果のとりまとめ、②変革教育・教育改革について、③持続可能な発展を促進するさまざまな取組、④ポスト「ＥＳＤの一〇年」の活動方針について、というものであった。各クラスターにおいて、七～一一のワークショップが同時に開催され、それぞれにおいて多様な議論が行われた。さらに本会議の昼食休憩の時間帯には毎日、つまり三回のサイドイベント枠があり、それぞれ同時に八つほどのワークショップが開催され、多様なテーマと実践例について報告と議論がなされた。これが本会議の諸会合であるが、これらとは別に文部科学省とＥＳＤユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会が主催した併催イベント「ＥＳＤ交流セミナー」も開催された。これも同じ名古屋国際会議場の限定された区画で開催され、主に日本国内のＥＳＤの活動成果や提言などについて三日間にわたり約四〇の交流セミナーが開かれた。三日間にわたって世界各地のＥＳＤ推進者が一堂に会してＥＳＤの一〇年の経験を語り、二〇一五年以降のＥＳＤの推進について提言をおこなったのである。

ESD ユネスコ世界会議（名古屋国際会議場）

	11 月 10 日				11 月 11 日				11 月 12 日			
本会議	開会式・全体会議①	昼食	ハイレベル円卓会議	ワークショップクラスター1	全体会議②	ワークショップクラスター2	昼食	ワークショップクラスター3	全体会議③	ワークショップクラスター4	昼食	閉会式
		サイドイベント					サイドイベント				サイドイベント	
	ブース展示				ブース展示				ブース展示			
併催イベント			ESD 交流セミナー①		ESD 交流セミナー②				ESD 交流セミナー③			

世界会議の意義と課題

会議に参加した多様な関係者の討議と提言の個別的な内容に立ち入ることはできないが、今回の世界会議が全体としてどのような意義をもっていたかを次に確認しておきたい。

第一の意義は、ＥＳＤの一〇年の間に世界のさまざまな国において、さまざまなステークホルダーによって推進されてきたＥＳＤ活動の成果が最終レポートとして公表されたことである。「我々の望む未来を形づくる Shaping the Future We Want」と題された最終レポート（全二〇〇頁）は、世界で蓄積されたＥＳＤの実践とその担い手の広がりこそ持続可能な地球社会を形成するための核心的な要素であると述べている（「序文 Foreword」参照）。最終レポートではＥＳＤの一〇年の成果を十項目に分けて詳細に説明しているが、その中心的なメッセージを筆者は次のようなものだと理解している。すなわち、持続可能な発展という挑戦的課題と向き合うことによって、教育は自己変革を行い、教科や専門の境界による知の分断化状態を克服し、正規の学校教育の枠を超えてすべてのステークホルダーと協働する社会的な意識変革になりうると

いうこと。そして教育の自己変革を通して生まれるローカルおよびグローバルな政治的リーダーシップこそ持続可能な社会をつくりだすための要となるということ、である。ＥＳＤ世界会議における多様な対話と議論によって最終レポートが描くＥＳＤの可能性が確認されたと言えるだろう。

第二の意義は、上記の成果を踏まえてポスト「ＥＳＤの一〇年」、つまり二〇一五年以降のＥＳＤ活動の行動計画である「グローバル・アクション・プログラム（GAP）」を始動することを確認したことにある。この行動計画ＧＡＰは二〇一三年一一月のユネスコ総会において承認されていたものであり、「ＥＳＤの一〇年」によって蓄積された世界の人々の意欲と行動力によって計画を始動させようというのである。ＧＡＰでは優先行動分野として（1）政策支援、（2）機関包括型アプローチ、（3）教育者、（4）若者、（5）地域コミュニティ、が設定されている。このことが意味しているのは、従来型の教育政策や教育機関、教育者、生徒・学生が持続可能な地球社会実現という目的のために根本的な自己変革を遂げ、地域コミュニティーとともに行動するというヴィジョンである。このようなヴィジョンが依拠する七つの原則が挙げられているが、その中で最も重要と思われる第四番目の原則（d）だけをここに引用しておきたい。

「ＥＳＤは、それが持続可能な開発へと社会の向きを変えることを目的としている点で、変革教育［世直し教育 transformative education］である。つまるところそのためには、教育と学習の枠組みを変えるだけではなく、教育のシステムと構造を方向転換させることが必要である。ＥＳＤとは教育と学習の核心に関わる事柄であり、これまでの教育実践に付け焼刃的な変更を加えれば済むと考えることができないものである。」

この原則を真剣に受け止め続けて、ＥＳＤを持続可能な社会を実現するための世直し教育だという考えを維持しつつ、一つ一つの具体的なＥＳＤ実践を今後我々が行ってゆけるかどうかが、世界会議の意義そのものが今後の我々に突きつける課題と挑戦であろう。手ごろな課題を与えて生徒・学生を現場に送り出して報告を行わせるだけで、『ＥＳＤをやった！』と自己満足する誘惑に我々はどれだけ抵抗することができるだろうか。

その点から考えても、二〇一五年に終了する国連の「ミレニアム開発目標 MDGs」の後継として現在提案されている「持続可能な開発目標 SDGs」（案）の中にＥＳＤが本当の意味で位置づけられるようにすることがこれからの当面の課題であろう。